
セミナリオ

白神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セミナリオ

【NNコード】

N5162Z

【作者名】

白神

【あらすじ】

一人の少年が神軍に選抜される。いわば徵兵令。少年は拒むが抵抗する力がなく、連れていかれそうになるがその時黒髪ロング美少女が現れる。少年は生き残れるのか。

神からの挑戦状（前書き）

初めてなのでよろしくお願ひします。

神からの挑戦状

神は人間に能力を与える。それは特定ではなく、平等に「与えられる」。

だが歳をとるにつれて

その能力は弱小化し消える

だがその能力をとどめる者も存在しその者達は一様に苗字に「神」の言がある

その者達は自分では能力の存在を認識できない。

そして彼らは15歳になつた時

神に神軍に招集され

死ぬまで戦う運命を背負う

つまり神は人間に能力を与えると神軍に誘つ

だが神も猶予を与える

ある挑戦状を送り付ける

それに勝てば招集は拒否される。

そして能力も変わりなく

存在する

ところが勝利したものはいない

彼が現れるまでは…

さてこれから始まるのは

神の挑戦に打ち勝ち、神に仇なした少年の物語ー

9時20分 7月

蝉が縦横無尽に鳴き喚いでいる

松尾芭蕉の俳句にも蝉について詩つてたなと思ったが今は関係ない。

今の俺には不快でしかないなぜなら来たからだ
手紙が

学校に行つたら靴箱に手紙が入つて女の子からのラブレターかな
と思つたら魔王からだつたみたい
そんな感じ

そして学校から出で
手紙を確認する

書かれていたことは

「手紙を受け取つたと同時に1時間の猶予を与える。当事者は時間
内に世界で一人だけ当事者を覚えてくれる人物を探す。
もし見つけることができれば生き残り、できなければあなたを狩り
に行きます。幸運を。」

いたずらだと思ったが
念の為だ

友達に電話しようと携帯をだし電話した。

だけど
「誰?」と冷徹にことじごく言われた

もちろん電話帳にあるやつ全員に電話した。

でも全員出なかつた。

たぶん全員の携帯に俺の連絡先はないだろつ。

だからみんな知らない電話番号からだから出なかつたんだ

「母さんと父さんな、…」

そう思つたが

母さんと父さんはもう死んでいる。

俺が6歳の時に交通事故でだ

それに双方のじいちゃんとばあちゃんも死んでる。

だから俺は

「世界で一人か」

絶望した

泣きそうだ。

その時俺の頭の横を蝉が
通り抜けた。

俺は反射的に頭を上げた。

「綺麗だな

今俺がいるのは丘の上

ここから眺める景色は

本当に綺麗だ。

それに今は夏で入道雲が
厳かに浮いている。

「ここの景色もこれで見納めか…」
どうせ俺は世界で一人と俺が人生最大の憂鬱を迎えた時

「…………ま……会おう……」

脳の中で声が響いた

そして映像が流れる。

今俺がいる同じ丘で黒髪ロングの少女が囁いている。容姿端麗の少女は笑いながらでも切なそうに…
と、そこで我に返った。

「なんだ？今の…」

おかしい気分だ。全然知らないと認識できればいいのに俺は知つて
る。

名前も思い出せない

でも…

彼女なら俺を憶えているかもしねないと思つたが
俺が忘れてるんだ

憶えているはずないじゃないか

「はあ 俺本当に独りだ…」

「みつけた。」

陽気な声が聞こえ、後ろを振り向く。

そこには、黒と白を基調とした制服のようなものを着た髪をツインテールに束ねた少女が立っていた
俺と同じくらいの歳だ

「まさか…」

見覚えはないが俺のことを憶えているのかと期待したが悉く崩される。

少女は鎌を持っていた

そして

「あなたを狩りに来ました」

人生の終了を告げる悪魔が立っていた。

神からの挑戦状（後書き）

ちょっと変なところで終わりましたが区切りが良かつたので終わりました。

主人公の名前は次回判明します。

次回もよろしくお願ひします。

最初の抵抗（前書き）

読んでいただければ幸いです。

最初の抵抗

ツインの少女が宣告して3分くらいが経つた。

俺は我に返り言葉を紡いだ。

「嘘だろ…だつて時間は！」

「もう時間は経ちましたよ。きずかなかつたの？悠長ですね～～」
くそつ俺が鬱期に入つてるうちに時間が経つてたのか
でもどうせ無理だつたし、悔しがつても仕方ないか。すると俺の気
分とは対称的な声で少女が、

「じゃあ狩らせていただきます。」

と言い、ゆつくりと俺の所に歩いてきた。

同時刻

丘を登る道を黒髪ロングの大和撫子を彷彿とさせる少女が走つてい
る。

かなり急な坂をもはや人間の成せる速度を超越した早さで走つてい
る。

徐々に進んでいくと、遠くに2人の人物を把握することができた。
1人は男でもう1人は鎌を持つた少女。少女はゆつくりと男に近づ
いている。少女はその異質な光景をみても動じない。そして彼女は
少し安堵した表情を見せたがすぐに真剣な表情に戻る。

「……舞久……」

速度を更に上げ、走つて行つた。

ツインの少女は、男の前に立ち

「私の名を言つておきます。私は、エルン・ディライト以後おみしりおきを」

「俺の名前は…」

礼儀だと思い名前を言おうとしたがエルンに止められる。「

「知つてゐる~子無舞久でしょ~なんで苗字に神の言がないのに神軍に招集されるのか知らないけど」

「は? 神軍つて…」

俺は聞こうとしたがエルンは不敵に笑い

「これも仕事ですから」その言葉と同時に

鎌が振り下ろされる。

目をつぶつた。そして

ジシッ

鈍い音が鳴り静寂が訪れ、俺は目の前を見て驚愕した

長い黒髪をなびかせ俺と同じ制服を着た少女が立っていた。

少女は俺の方に向き

優しく微笑んで、

「久しぶり 舞久、また、会えたね」

その笑顔を見て

すべてを思い出した。その黒髪少女のことを

俺には幼馴染みがいた。

だけど幼馴染みは俺達が中学に上がると同時に引っ越しした。その引っ越し前日に俺達は丘の上で話していた。

「もう会えないね。ここは東京で私は九州にいくしさ

「そんなことないだろ。どうせ日本にいるんだだからさ」

「うん、そうだね。会おうと思えば会えるよね。

舞久が来てよね。待ってるから」

「ああ、なんならジヒット機で会いに行つてやるよ。」

「うん、またいつか会おうね。」

幼馴染みは嬉しそうに楽しそうにだけど泣きながらいった。

光速のように記憶が蘇る。俺には幼馴染みがいた。
それがこの黒髪少女だ。

名前は

「……守……」 そう幼馴染みの名前は

神瀬川 守

「お前まさか…」

「そう、私は神軍に招集された。でも舞久も招集されるのを知つて
助けに来たの。」「な…」

マジかよ… 守も

「へへそうか。帰世権を使ってこの世界に來たんだ。でも、あれは
1回だけしか使えないのに」

「それでも、舞久を助けたかった。」

「だけど、いままさに神軍に招集される者を助ける、まあ、阻止す
れば罪になる」

「ええ、わかつてゐつけど」 守はエルンを蹴り、エルンは避け、後
ろに跳んだ。

守の手には、鎌を防いだこと傷ができていて血が出ていた。
エルンが若干叫びながら

「それでどうするの！

私と…」

「戦うわ」

守が冷静に言つ。

「舞久と二人でね。」

俺は、即座に意義する。

「ちょっと、守！」

何言つてんだ！あんな鎌持つた奴に勝てるわけないだろ！」

「今の舞久ならぬ。でも」守は、俺に手を差し出す。「私の能力があれば、行ける。私を…信じて」

俺が迷う暇はない

もうこれしか方法がない。「分かつた。守が言つんだからな。」「ありがとう。じゃあ手を握つて」

そして手を握つた。

瞬時に空間が歪み、電流が走る。だがすぐに収まり煙が立ち込める。

「な…」

エルンは驚愕の色を隠せない。

「俺は、さつき生きることを諦めたが、前言撤回だ。神軍がなんだ？なんもん潰してやる。」

そこには、刀を持った白髪の美少女が立っていた。

最初の抵抗（後書き）

マンガで例えるとまだ1話もいってない。ヤバイ

女になつた男（前書き）

「」感想お願いします。

女になつた男

日本刀を持つた白髪の少女が口火を切つた。

「なんで女になつてんの？」白髪の少女＝舞久みみたいな少女の体は当然女らしい体だが

「胸に膨らみがあるし、なにより、勲章が、俺の男である存在証明が…」

『ないね。』心中で守の遠慮がちな声が聞こえる。

「まさか、嘘でしょ？ 融合するなんて…」

エルンが驚愕している。

「勲章が…俺の…」

「融合すれば、必然的に能力の高い者の特徴が繁栄される。だからあなたはいま女の子の姿つてわけよ。」「そういうことか。原因を知れて良かつた。」

『立ち直つたか』

「まあ、今は目の前のこと集中するか」

舞久は刀を強く握り、体勢を低くする。

「私に勝てるかな？」

エルンは腕時計をさりげなく確認し、戦闘態勢に入る。

『守、この刀は凡か…』『無理』

『だよな、じゃあ戦るか』「後悔しないでね～」

そして、同時に土を蹴り

キイン

刀と鎌が衝突し、

「意外に速いね～」

「俺も驚いてるよ」

『確かに身体能力、反射神経は格段に上昇している。だけど、まだ

…』

「だけど、まだまだだね。刀も振るつたことがないのに意氣がつて
んじゃねえよ」「な…」

エルンは鎌で連續的に切り掛かる。舞久は防戦一方で押されていく。
「私は！お前みたいな目をしてる奴が！嫌いなんだ！反吐が出る…」
舞久は防御しながら、確実に押されているが、あきらめてはいない。
舞久の目は言うなれば、青空の如く、全く淀んでいない目でエルン
を見据えている。

「私は！「うるせえ」

鎌を最大限に振りかぶったエルンを舞久が言葉で制した。

「うあ……」「隙あり」

比較的美少女な容姿をしている少女が男勝りな言葉を吐いたことで
エルンは硬直してしまった。

舞久はそこを見逃さずに
刀を斬り付けた。

ザーン

「ぐはあっ　く…そ…」

血が溢れ、エルンは倒れ伏す。

「はあ…はあ…勝つた」

『本当に勝つたんだ！』

「はあ…もう時間だよ」

エルンがそう呟くとエルンの元に魔法陣が形成されエルンは魔法陣
に沈んでいく

「これで勝つたと思つたらダメだよ、はあ…あなた達のことは全て
の神に知れ渡る。覚悟しひときなさい」
そして、エルンは魔法陣に沈んだ。

蝉の鳴き声が耳に入つてくる。それで今が夏といつこthought。

「あつつく、汗だくだく」

……まあとりあえず終わつたな

そう言いながら町の景色を眺める。

『やつぱり綺麗だな』いつ見ても…本当にきれい今までに見た中で一番綺麗かもしねない。

「さてとそろそろ元に戻るうぜ、疲れたし寝たいんだよ」

『ああ～それなんだけど～』と守が口籠もる。

「なんだよ、早く戻る…『戻れないんだ』え？…」

戻れないってことは女の姿で暮らすといふことに…

「ぐあああああああ～！」

俺の男の黙、チ○口は元に戻らないのか！」

『ちよつ普通にそんなこと言わないでよ！変態』

守の言葉に激怒したのか口を最大限に開け、「女には分からぬうつなあ～あれを亡くすといふことは一流企業の社長が突然二一トになるぐらいの絶望なんだよ」と叫んだ。

『うひ～～、ちゃんと元に戻る方法を考えるから』

「え、戻れるの？それを先に言えよ」舞久は安堵した。

『でも、この町からは、離れないといけないけど…』「ああ、分かつてる。」

『じゃあ、帰ろう。』

そして、舞久は歩きだした依然と蝉が鳴き、入道雲が浮いていて典型的な夏のイメージを具現している。

『うるせえな、蝉は』

だが今は、蝉の声を不快には思わなかつた。

女になつた男（後書き）

ひとつと漫画でこいつと一緒に1話が終りました。これからもひとつとまためらわるよつに頑張りたいと思います。これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5162z/>

セミナリオ

2011年12月17日22時54分発行